

特集
コレクションと
美術館

視覚の現場

須田
記念

2020年8月 第3号



目次

第3号の発刊にあたって／原田平作	2
口絵カラー図版	5

須田国太郎論

須田国太郎が遭遇した風景——作品に見る画家の視点／左近充直美	31
若い版画家がみた須田国太郎／永井雅人	37

特集 コレクションと美術館

特集「コレクションと美術館」にあたり／島田康寛	43
足立美術館のコレクション形成とその展開／安部則男	45
京都国立近代美術館のコレクション——三つの特徴と活動指針／池田祐子	48
竹喬記念館から地方拠点美術館への展開——望外のコレクション形成／上菌四郎	52
西宮市大谷記念美術館——展覧会とコレクションの密接な関係／枝松亜子	56
池長孟コレクション——南蛮美術館から神戸市立博物館へ／岡 泰正	60
福田美術館とそのコレクションについて／岡田秀之	64
和歌山県立近代美術館における「コレクションと美術館」／奥村泰彦	67
美術館の居場所——泉屋博古館の住友コレクションが伝えるもの／実方葉子	71
大阪中之島美術館コレクションの三〇年／菅谷富夫	75
島根県立美術館におけるコレクションの活用／田野葉月	79
現代美術作品をコレクションすること。／中井康之	82
奈良県立美術館のコレクション／松川綾子	85
京都の美術を歴史化するために——京都市美術館のコレクションと収集方針／山田 諭	89
京都府立堂本印象美術館におけるコレクションの展開と実践／山田由希代	95

今言いたいこと

ある画家の回想——須田国太郎の教えを基礎として／伊藤弘之	101
新たな美術鑑賞——コロナ禍を経験して思うこと／鬼頭美奈子	104
コロナ禍と家庭——「アカルイ カテイ」展をふりかえって／竹口浩司	108
今の美術の状況と「インド宮廷絵画」から考える／畠中光享	112
一葉の絵はがき——浅井忠と壁画／前川公秀	115
緊急事態下で考えたことを、少し／松本 透	118

SUMMARY／各執筆者（川上幸子訳）	124
編集後記／島田康寛	125
財団からのお知らせ	126

須田国太郎《鶉》(部分)

昭和27年(1957) 京都国立近代美術館蔵

口絵カラー図版12頁参照



須田国太郎《猫》(部分)

昭和24年(1949) 鉛筆・紙 33.5×24.5cm 個人蔵

須田国太郎は旅行家であった。昭和初期から病気のため旅行が難しくなる晩年の昭和32年(1957)まで毎年何度もの旅行をしている。それはもちろん画家としてスケッチや写生を目的としたものではあるが、戦後は全国の県展や市展の審査、講演などのためでもあった。そしてもう一つ注目されるのは、岡山県から広島県に掛けての須田を尊敬し、その作品を愛好しコレクションする個人宅を訪ねることを目的とする旅でもあった。

戦前のある日、広島県神辺町の医師大林氏が知人の紹介を得て目利きで優れたコレクターでもあった京都の高尾氏を訪ね、自分は絵を買い求めたいのだがどんな画家のものがいいか、安井曾太郎でしょうか、梅原龍三郎でしょうかと尋ねたところ、高尾氏は即座に「それなら須田国太郎です」と答えたという。大林氏はこの言葉に従い、高尾氏の紹介で須田を初めて訪問、以後近づきになった須田と親交を結ぶようになり、須田作品のコレクションも次々と増えていった。やがて、須田熱は同じ町の酒造家村上氏にも感染し、岡山県の東山氏、田村氏らへと広がり、両県にまたがって須田愛好家は増えていった。これには独立美術協会の友人小林和作も大きく関わっていたのは言うまでもない。

そんな、昭和24年1月大林家を訪れた須田はいつものようにくつろぎ、なついていた親子の猫をさらさらとスケッチし、大林氏に進呈したのがこの作品である。即興の面白さのなかにも親密な雰囲気があふれている。(島田康寛)